

Ⅲ 魅力発見！弥生ブランド～青谷上寺地遺跡出土品～

—重要文化財指定記念講演会の記録—②

横須賀 倫達 北浦 弘人 君嶋 俊行

本章は、図1のとおり開催した重要文化財指定記念講演会の第二部として以下のパネリスト、司会によって行った対談の記録である。

パネリスト

横須賀倫達（文化庁文化財第一課）

北浦弘人（鳥取県とっとり弥生の王国推進課）

司会

君嶋俊行（鳥取県とっとり弥生の王国推進課）

※所属は開催当時のもの

君嶋 ここからは第二部ということで、先ほどご講演いただきました横須賀さんとの対談をお送りします。

まず最初に、横須賀さんにこのたびの重要文化財指定の調査の様子を伺いたいと思っております。

ます。最終的に1353点というたくさんの資料が指定となりましたけれども、これに向けて、文化庁のご指導のもと、平成28年度から30年度までの3カ年をかけて、調査が行われました。調査ではいろいろご苦労もあったんじゃないかと思いますが、その辺りの苦労話から伺ってよろしいでしょうか。

横須賀 調査には、北浦さん、君嶋さんも一緒にいただいて（写真1）、資料を並べて、最終的には図2のようなリストにまとめていくために、1点ずつどういう特徴があるのかということ議論をしながら固めていくのですが、これを1353回繰り返したということになるわ

重要文化財指定記念講演会
魅力発見！ 弥生のブランド
 ～鳥取県青谷上寺地遺跡出土品～

日時 2019年9月14日（土）
 午後1時30分から午後3時30分まで

会場 とりぎん文化会館 第1会議室
 （鳥取市尚徳町101番地5）

主催 鳥取県
 構成 【第一部 講演】午後1時30分～午後2時30分
 「遥かなる弥生世界が映る
 ～国のたから重要文化財と青谷上寺地遺跡の出土品～」
 横須賀倫達氏（文化庁文化財第一課 文化財調査官）

【第二部 対談】午後2時40分～午後3時30分
 「魅力発見！ 弥生ブランド～青谷上寺地遺跡出土品～」
 横須賀倫達氏、鳥取県職員

定員 150名（受講無料）
 申込期限 2019年9月9日（月）
 申込方法 下記まで電話、ファクシミリ、メールにて事前にお申込みください。
 （会場に余裕がある場合のみ当日入場が可能です）

鳥取県地域づくり推進部文化財局
 とっとり弥生の王国推進課青谷上寺地遺跡整備室
 電話 0857-85-5011
 ファクシミリ 0857-85-5012
 メール tottori-yayoi@pref.tottori.lg.jp

2019年度 文化庁 文化資源活用推進事業

図1 ポスター



写真1 調査の様子

番号	品名		数量	単位	所在地	調査年度	調査者	調査方法	調査結果
	名称	種類							
1	土器	土器	30	個	鳥取県青谷上寺地遺跡	2018	横須賀倫達	現地調査	土器30点、弥生時代の土器と推定される。弥生時代の土器と推定される。弥生時代の土器と推定される。
2	土器	土器	10	個	鳥取県青谷上寺地遺跡	2018	横須賀倫達	現地調査	土器10点、弥生時代の土器と推定される。弥生時代の土器と推定される。弥生時代の土器と推定される。
3	土器	土器	5	個	鳥取県青谷上寺地遺跡	2018	横須賀倫達	現地調査	土器5点、弥生時代の土器と推定される。弥生時代の土器と推定される。弥生時代の土器と推定される。
4	土器	土器	2	個	鳥取県青谷上寺地遺跡	2018	横須賀倫達	現地調査	土器2点、弥生時代の土器と推定される。弥生時代の土器と推定される。弥生時代の土器と推定される。

図2 重要文化財議案説明書別添目録

けです。例えば、小さな玉だったりですとか、^{やじり}鏝ですとか形が単純で特徴がないものっていうのは、数千点あろうが割と簡単といいますか、作業がどんどん進むんですけども、何せ青谷上寺地遺跡出土品の特徴というのは色々な種類のものがあって、さらに複雑な形をしたものが含まれているということで、これを一つ一つ見るのですごく時間がかかるんですね。大体2泊3日の予定でお邪魔して、目標を300点とか定めて始めるんですけども、なかなかそこまでいかないんですよ。ここの種類と内容の豊富さを示すことでもあるんですけど、そういった意味で体力的にも頭腦的にもですね、非常に大変な仕事だったと思っています。ただ、もっと大変だったのは、物を出し入れしていただいたりした作業員の皆さんや、表の元原稿を作っていた君嶋さんや北浦さんで、本当に鳥取県の皆さんのご助力のおかげで、ここまでたどり着いたと思っていますので、この場を借りて感謝の気持ちを述べさせていただきたいと思います。

君嶋 写真1は骨角器の調査をしている様子だと思いますが、私も記憶がよみがえってまいりました。本当に一つ一つ見て、それを図2のリストにあるように、文章で説明をしますので、かなり文章力も鍛えられたことを思い出します。重要文化財に指定されたということで、関係の皆さん本当にお疲れ様でございました。

次に、青谷上寺地遺跡の重要文化財の魅力と価値について、横須賀さんからは先ほどのご講演の中でこの点についてお話いただいたんですけど、実際にこれを土の中から掘り出された北浦さんはどのようにお考えでしょうか。

北浦 とにかく私は青谷上寺地遺跡の一番の魅力と価値というのは、要するに弥生時代の様子を非常にリアルに知ることができるということに尽きるんじゃないかなというふうに思っています。発掘調査に携わりまして思いましたことは、何と生々しい遺跡であろうかということで

す。要するに、遠い昔という感じではなくて、ひよっとしたらつい最近まで使ってたんじゃないかと思わせるぐらいのいい状態でもものが保たれているということで、それが我々に色々なことを語りかけてくるといったところだろうと思っています。

例えば写真2の紀元前4世紀頃の貝塚ですとか、写真3の2000年ぐらい前のごみ穴に捨てられたイノシシの顎の骨の集まりのように、弥生人たちがどんなものを食べていたのかとかということが、個別具体的に分かります。そして写真4の人骨には鋭い金属の刃物で傷つけられたものも含まれていましたので、ひよっとしたらいわゆる「倭国乱」といわれているものを示している可能性もある。さらには、形質、或いはDNAから具体的に弥生人そのものが分かってきます。

また、出土状況も非常に生々しく、例えば写真5は骨角製のヤスが4本束ねられている状態で海の底に突き刺さった状態で発掘された様子です。これまでこういう骨角製のヤス先って全国でたくさん発見されてるんですけども、その使われ方が分かっている例はほとんどないですね。それから写真6は輪付土玉が出土した様子です。土玉というのは、弥生時代から古墳時代にかけて日本中の色々な遺跡から、それこそ何万とかでは足りないんじゃないかと思われるほど出土しているのですが、これまで一つとしてその使い方が分かっている例は見つかっていなかったんです。ところが青谷上寺地遺跡からはこういうヒノキの細枝の輪っかに通して束ねた状態で出土していますので、用途はまだ分からないのですがこういう使われ方をしているということが生々しく伝わってきます。

写真7は、先ほど（第一部：『青谷上寺地遺跡発掘調査研究年報2020』収録）横須賀さんがご紹介された琴の出土状況なんですけど、写真8の木で組んだ台や箱が同じ場所から出土していて、これらが何らかの関係性を持って当時ここに置かれたと見ていいんだろうと思いま

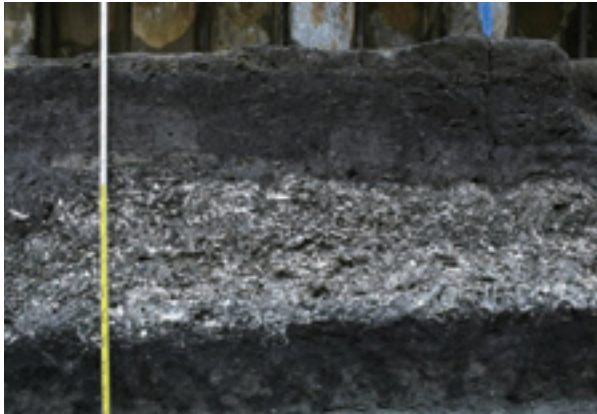


写真2 貝塚



写真6 輪付土玉が出土した様子



写真3 イノシシの骨が集中して出土した様子



写真7 琴・台・箱が出土した様子



写真4 人骨が出土した様子



写真8 台・箱



写真5 組み合わせ式のヤスが出土した様子



写真9 ト骨が出土した様子

す。写真9はト骨がまとまって出土している様子で、先ほど横須賀さんから韓国の^{ぬくと}勒島遺跡との類似性が紹介されたところですが、その占いの作法が初めて分かった例といえます。

写真10は人骨が出土した溝の東隣の溝から、たくさんの木製品が集積された状態で出土した様子で、この中には写真11のような建築材、つまり家の構造物といったようなものも含まれています。

写真12は溝の上に杉の大きな木の板で蓋をしている状態というのが発掘された様子で、その当時のムラの様子が生々しく伝わってきます。

ものづくりのリアリティが感じられる出土品



写真10 木製品の集積が見つかった様子



写真11 建築材

も多くあります。たくさん見つかった鉄製の加工具のなかには他の遺跡では見られない写真13のような先端が細く耳かきのような形状のようなものもあり、木製容器の細かいところの加工に用いられたと考えられます。それからたくさん見つかった玉関係の資料（写真14）には、玉そのものだけでなく、原石から加工途上のそれぞれの段階のものが全部あり、工程がたどれるということが特筆されます。写真15は、ガラスの破片や細片を集めて、それを溶かし直そうとしている途中のものです。大きさは7mmで小指の先ぐらいの小さなものなんですけれども、こういったものがあるということは、青谷上寺地でガラスの加工もしていたことがわかるという資料になります。

それから、漁労や狩猟だけでなく、農業に関する出土品もたくさんあります。一般にイメージされる^{たげた}田下駄は板に穴が開いているものかと思いますが、写真16のように板の側縁に挟り込みを入れるタイプの田下駄は青谷上寺地のオリジナルといってもいいようなものかと思います。それから、^{ほづみぐ}穂摘具としては^{いしぼうちょう}石庖丁を皆さんよくご存知だと思えますけれども、青谷上寺地



写真12 蓋をした溝が見つかった様子



写真 13 鉄製加工具



写真 16 田下駄



写真 14 玉作関連遺物



写真 17 木庖丁

いるんですが、このようなことも具体的に分かってくるところが青谷上寺地遺跡出土品の一番の特徴で価値だろうというふうに思います。

君嶋 ありがとうございます。リアル、それから生々しいという表現がありました。これまでご説明してきたように出土品の保存状態が大変よい。だからこそ、非常にたくさんの情報を得ることができるという点で、まさに弥生の博物館とっていい遺跡だと思います。

お二方の青谷上寺地遺跡の重要文化財指定についての評価が確認できたところで、次に本日の講演会のテーマであります弥生のブランドについて、お話を伺っていかうと思んですけども、北浦さん、そもそも、弥生ブランドって何でしょうか。

遺跡では写真 17 のように木製のものがたくさん出土しています。こういった農業のやり方が、青谷の特徴だということを今日司会させていただいている君嶋さんの研究で明らかになってきて

北浦 はい、ちょっと個別具体的な話をしたいと

写真 15 ガラス塊^{かい}





写真 18 花弁高杯の復元品



写真 19 花弁高杯の花弁模様

思います。写真 18 は花弁高杯^{かべんたかつき}の復元品ですが、上のお皿の部分と下の台の部分^{かべんたかつき}が別々に出土しているのをつなぎ合わせた状態で作成しております。

この花弁高杯という名称は、写真 19 のように、このお皿をひっくり返したところに花びらのような彫刻があるというところからそう呼んでいるんですが、本当にこれが花びらを意識したものかどうかは判断が難しい。要するにこれは、我々が発掘した時には、上下がついていない状態なので、パッと見た第一印象で、これ花びらだと思ったところから始まっているんですけども、実際には写真 18 の形で使われていて、横から見るわけですよ。ですから、花びらとしてイメージされるということはないかもしれない。むしろ、弥生時代の高杯には台の部分にスリットが入るのですがこのスリットの本数がだんだん増えていって、その最後の始末のところこういう表現になっていると見た方がひょっとしたらいいのかもしれない。ただ私は、工人も作った時にこれは花びらだというふう^{かべんたかつき}にきっと意識しただろうと思いたいのですが。

この花弁高杯の特徴として2つの点が挙げら



図3 花弁模様各種

れます。

ひとつは見た目を重視した容器で高い装飾性があるということで、花弁模様とか、飾り耳、透かしといった非常に精巧な作りで、硬くて木目が美しいヤマグワが使われ、さらに赤く塗られています。

もうひとつは、青谷上寺地遺跡で多数見つかっている一方で、日本海沿岸に広く分布をしているということです。ただし、出雲や北陸等の遺跡では、それぞれの点数はせいぜい1点程度しかないため、おそらく各地の有力者がそれを所有していたんだろうと考えられています。

図3は花弁高杯の花弁模様を集めたものですが、いくつかタイプがあります。ここには花弁模様が4～6分割のものを挙げております。4分割のものは少し花びらっぽくないんですが、5分割のものは、花弁模様一つ一つの隙間の空き具合がちょっと広がっていて一番花びらっぽく見えます。この5弁の花弁模様は、漆塗りの容器の蓋と底に、赤い漆で描かれる場合も

ありますが、こういう彫刻で表現する場合にはおそらく4分割が一番簡単にできる。その次に簡単なのは6分割で、5分割というのは、少し幾何学的な知識も要るのでなかなか難しい。だから単純に考えると、4→6→5という順番で進化していくと考えたら理解しやすいんですが、おそらくそんな単純なものではないんだろうと思います。それぞれの工人のセンスとか、或いは要望に合わせて作られてるんじゃないかなと思います。

花卉もさることながらこの飾り耳というのもとても特徴的な部分でして、かなり色々なタイプがあるんですが（写真20）、実は一つとして同じものはなく全部違います。青谷上寺地遺跡で出土している10数点、さらに図4のように東は石川県から西は福岡県までの範囲において日本海沿岸のあちこちで出土しているものも、すべての飾り耳が全部違う形、違う大きさをしています。基本的に花びらのような彫刻を施すことをベースとしながらも、こういうふうミニバリエーションをつけてるということで、この辺りも非常に興味深いところです。

そしてこういった非常に装飾性に富んだものが、日本海沿岸の各地で使われていたということで、1個1個それぞれ個別で作って、それを出荷しているといった状況がうかがわれます。



写真20 花卉高杯の飾り耳各種

この花卉高杯は、青谷からは、10点以上出土していますが、基本的にはそれ以外の遺跡からは1点ということで、やはり青谷上寺地で作られたものが各地に送り出されていると見るのが妥当ではないかと思います。そして、先ほども言いましたが、やはり各地の有力者層が所持していたんだろうと考えられます。

そして、今日のタイトルになっております弥生ブランドのブランドとは一体どういうことかということもまず考えてみたいと思います。アメリカマーケティング協会というところではブランドについて、「ある特定の商品やサービスが消費者・顧客によって識別されているとき、その商品やサービスを「ブランド」と呼ぶ」と定義しています。一方的に作って一方的に売っても、求める側がこれを欲しいというふうには思わないと、ブランドにはならないわけですね。今でも高級ブランドで鞄とか、時計とか色々あると思いますけれども、それはやはりそれを欲しいと思う消費者がいるからこそ成立するものだ。そう考えますと、この弥生ブランドというものも、青谷上寺地で作る花卉高杯を求める各地の有力者層がいて初めて成立するものだと思います。なぜこれを欲しがったかということ、社会学の少し難しい言葉で、威信財いしんざいという言葉があるんですね。威信財というのは、要するに非実用品で、かつそれを見せることによって有力者の権威を示すことができるような効果のあるものということで、まさに花卉高杯は当時そのように認識されていたのだと思います。



図4 花卉高杯の出土遺跡

また、長距離の交易で首長が外部の社会から入手するというのも重要です。つまり、うちのリーダーは、遠く離れたところからこんな素晴らしいものを手に入れることができるぐらいの力を持っている、ということです。やはり地域が、時代が変わっていく中で生き残っていかなくちゃいけないという時には、交易で色々なところと繋がってなければいけない、そういった力がなければ有力者として認知されない、そういう側面があるんですね。そう考えますと、やはり青谷上寺地の花卉高杯というのは、弥生ブランドと言っても、差し支えないんじゃないかと思う次第です。

君嶋 現代の私たちがブランド品を欲しがると同じ意味で考えることもできますし、また一方で、有力者が自分の権威を示すという、弥生時代ならではの意味付けもあるということですね。横須賀さん、今のお話についてどう思われますでしょうか。

横須賀 そうですね。確かにこの花卉高杯に関



写真 21 古墳時代の甲冑（金井東裏遺跡出土）
の復元品

しましては、青谷、この地域の一つのブランドだったということがいえるんじゃないかと思えます。そして、私がすごく驚き感心してるのは、そのブランドを独自に展開して、流通ルートを開発して、主体的に色々なところに送り込んでいたということです。

私自身は、個人的なテーマとして古墳時代を勉強してるんですけども、その地方独自のブランドの展開というのが、実は古墳時代から、ないわけでは決してないんですがすごく見えづらくなると感じています。写真 21 で示しているのは古墳時代の甲冑です。鎧かちゅうというよろいと無骨なイメージがありますが、小札こざねと言って、長さ 5、6 センチ、幅が 2、3 センチの孔の開いた小さな鉄板を、まずは横に組んで段を作って、これをさらに縦にくみ上げていきます。横に組むのを綴とじる、縦に組むのを緘おどす、というんですが、そういった作り方をするんですね。これは平安時代や鎌倉時代以降の大鎧おおよらいの作り方と共通しています。あとは黒漆を塗っていたり、或いは緘すのに、革紐だとかですね、組紐なんかを使って、平安時代の大鎧ですと色々緘しとか、赤色緘しなんてものもあつたりしますが、古墳時代のものも非常にカラフルな、いわゆる最上級の工芸品だったと思うんです。ただ、例えばこの甲冑のような古墳時代の最高級の工芸品っていうのは、実は地域に偏りなく、南は九州から北は東北まで満遍なく出土します。というのはどういうことかと言いますと、古墳時代になると、もう少し政治の中心っていうのがはっきりしてきて、大和政権というのができて、そこに権力も、経済的などころも、工芸技術も、あらゆるものがそこに集中していくと。

そして、その威信材的なもの、いわばステータスシンボルとなるような最高級の工芸品は、中央から地方に渡されるものになってくるわけで、青谷上寺地で見られたような、地方独自の展開っていうのが非常に見えづらくなります。この後の時代、奈良時代になると、木簡もっかんだとか、風土記ふどきなんかで、各地の特産品っていうのはよ

く分かるんですけども、それにしてもやはり皆さん知っておられるように、^そ租^よ庸^ち調^よの庸として税として中央に集められてるイメージがどうしてもついてしまう。

では、弥生ブランドに近いものは何かって考えたときに、思い浮かぶものを紹介します。私、長いこと会津若松の博物館で働いてまして、すごく親しみがあるんで紹介したいと思います。写真 22 が会津漆器といって会津の特産品なんですけど、こういったものがいつ開発されたかっていうと、実は江戸時代なんですよ。全国各地で、各藩が財政を何とか立て直そうとって、いろんな産業を起こして、それでネットワークを作って流通させた。弥生ブランドはそういった姿に非常に似ているんじゃないかということ、ひとつ感想になってしまうんですけども思いました。こういった展開ってというのは、実は現代のですね、企業なんか通じるところがあるんじゃないかと、そういうイメージを持っております。

君嶋 ありがとうございます。古墳時代から近世に至るまでのブランドがどういうものかということで、ご説明をいただきました。

実は会場から、「ブランドになるためのPRの方法は」というご質問をいただいております。当然、インターネットやSNSなんかない時代ですよ。北浦さんのお話にありました、青谷ブランドとしての花卉高杯が非常に人気があっ



写真 22 会津漆器

て、流通していたということはよく分かったんですけども、ここで気になるのが、非常に遠く離れた日本海沿岸の各地で、どうして花卉高杯というものの存在が知られ、それが欲しがられたのでしょうか。このブランドについての情報ってというのはどうやって共有できたんでしょうか。北浦さん、そのあたりはどのようにお考えでしょう。

北浦 PRの方法ですか。口コミだろうと思うんですけども、その伝言ゲームをしていくためのネットワークというのは当然必要なわけですね。先ほどの横須賀さんのご講演にもありましたけれど、玉が弥生時代中期頃に青谷のブランド品だったということがありましたけれど、最近の調査で、実際に青谷で玉を作っていたことがわかる状況というのが発掘されました（図5）。管玉という種類の玉以外にも、玉の材料となる石を切るためののこぎりのような薄い石の板ですとか、穴をあけるための針ですとか、そういったものも含めたものが、この発掘した範囲のこの赤く示した部分で集中的に出土しているということなんですよ。ただ、建物が上に建っていたという状況は確認できなかったんですけども、何らかの覆い屋のようなものがあって、その下に玉作りの場所があったことは想定される場所で、青谷で玉を作っていたことはもう間違いなさだろうというところですよ。

そして、作られた玉が九州の王墓の^{おうぼ}甕^{かめかん}棺に副葬品として納められているという状況があります。この玉の原石は石川県小松市の^{ぼだい}菩提というところから取れるんですけど、これが青谷に持ち込まれそれを加工して九州のお墓で副葬されている。もちろん一方通行ではなくて見返りがなければ交易ということは言えなくて、朝鮮半島や大陸に近い九州は鉄器や青銅器を見返りとして分配していくというネットワークがあるということがいえると思います（図6）。この流れと図4に示した花卉高杯の出土遺跡がかぶってくるわけですね。

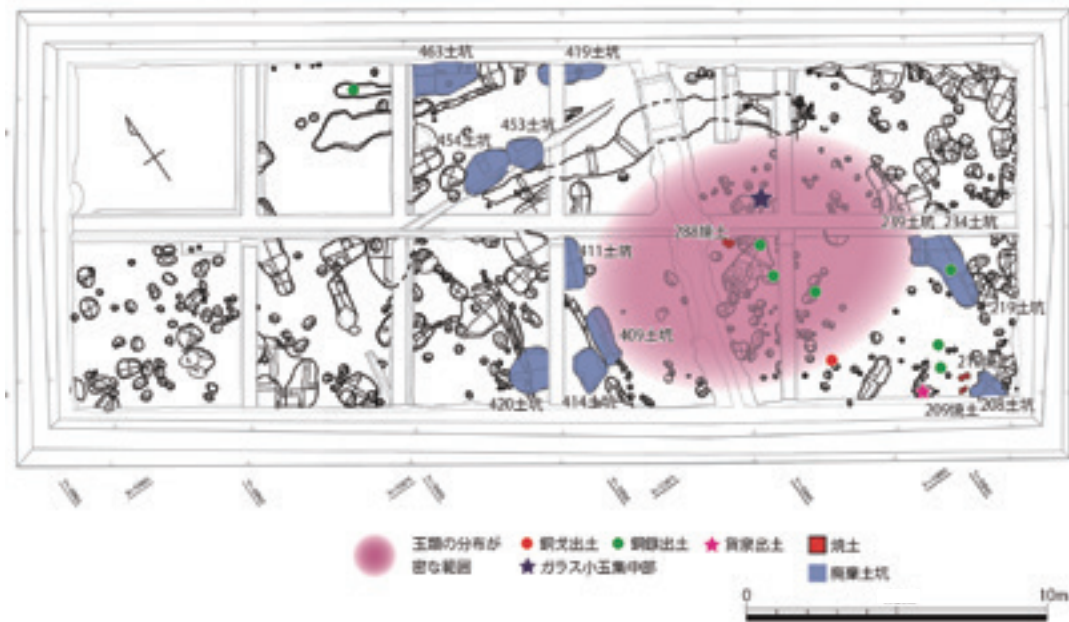


図5 玉類が集中して出土した箇所（第17次発掘調査）

花卉高杯の流通は、大体 1800 年ぐらい前の弥生時代後期、この玉の流通よりも 200 年ぐらい後の話になるのですが、どうもこのあり方というのがこの日本海沿岸地域の交易ルートに重なってくる。だから、時代は移っても、このルートがずっと存続していく中で、こういうものを作ってるんだという宣伝をしたかどうか別として、青谷上寺地ではこういったものを作る技術があるということが知られていて、何か威信材のような、ステータスシンボルになるようなものを作れないかという相談があったかもしれないし、そういうニーズにこたえて、最終的には美しい花卉高杯に至ったのかもしれない。青谷はどうも、中継加工貿易都市みたいな感じがあるので、そういったニーズに敏感に反応できるということがあったのではないかと。また、このルートを使えば各地で同じような情報を共有することもできたんじゃないでしょうか。ものだけが動いてるんじゃなくて人も一緒に動くわけですから、そういう人たちの口伝えで、青谷上寺地はなかなかすごいものづくりをしていて精巧なものを作る腕前を持っていることはみんな知っていたんじゃないかなと思

う次第です。

君嶋 もう一つ、「交易の対価はなんですか、物々交換ですか」という会場からのご質問もあるんですが、今のお話からしますと、例えば弥生時代中期であったら、玉と鉄とか、後期であったら、高杯と鉄とか、そういった交換というイメージでいいですかね。

北浦 基本、そうだと思いますし、これまでもそういう解釈が強く言われてきているところなんですけど、最近ちょっと風向きが変わった部分もあります。先ほどお話がありました中国の新という国で作られた貨泉（写真 23）というお金ですが、こういったものは日本の各地の有力な集落遺跡からしか出てこないんです。かつては弥生時代に貨幣流通経済があったなんて信じられないという前提があって、青銅器を作る材料として使われていたんだと言われてきたんですけど、ひょっとしたら一部でそれが貨幣として流通してるんじゃないかということ主張する動きも最近は出てきているようです。

君嶋 こういうお話を聞いていますと、弥生時



図6 玉を中心とした交易

代のイメージが、随分と変わってきていることが分かります。お米づくりだけをしていたわけではなくて、こうやって海に漕ぎ出していった交易をする、随分アクティブなイメージが描けるかと思うんですけども、横須賀さんはどう思われますか。

横須賀 そうですね、やはりこれだけ広域に動き回っていたということは驚きですが、青谷の出土品を見れば、農業だけやってる牧歌的な農村というイメージではなくて、もっと複雑かつ、多様な村の姿というのが、描き出せるんじゃないかと思います。田下駄があったり農具があったりということからは、農業を生業にされていた方がいたことは確かです。ただ、漁労具を含む多様な骨角器からはお魚をとったり貝をとったりする専門の方が、非常にたくさん出土している建築部材からはいわゆる大工さんの人ももちろんいたことが分かります。それには木を切り出す工具なんかもたくさん出てますので、そういった職人さんもいたはずですね。さらにはこれだけの規模の村を運営する人、今の政治家的な方もいたはずですよ。当時は政治と祭祀は切り離せないものですから、たくさん出土し



写真23 貨泉

ている祭祀具が示す祭祀執行者がそのような人に当たるのかもしれませんが。

それに加えて、このようなすばらしいものづくりの専門技術者も存在していて、それを外に出していく、営業さんというか商売人というか、そういう性格だけを持った人だとは限らないんですけども、そういった人も恐らくはいたんだろうと。

かなり多様な社会的分業があって、いろんな生業、いろんな役割を持った人たちが、村の中には共存していたと。そういうイメージをぜひこの青谷上寺地遺跡の出土品から感じ取っていただきたいなと思っております。

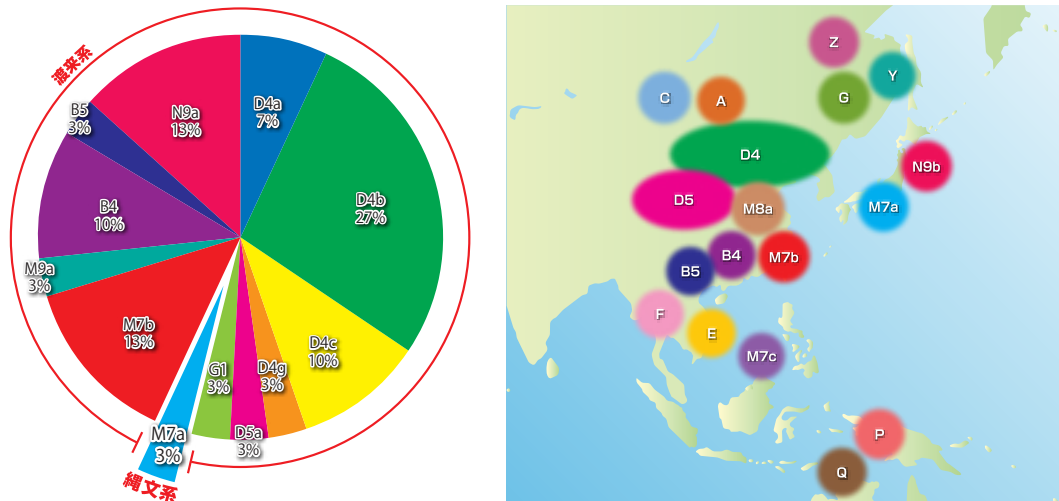


図7 人骨DNA分析の結果（ミトコンドリアDNAハプログループ（左）とその分布（右））

君嶋 ありがとうございます。このところ取り組まれております青谷上寺地の人骨のDNA分析からも、弥生時代のイメージを変えるような成果があったということでテレビや新聞で報道されていますけれども、北浦さんにこのあたりところを教えていただければと思います。

北浦 はい。青谷上寺地遺跡からは5300点以上の人骨が出土していて、現在、国立科学博物館などと共同研究でDNAの分析をしています。その結果、図7の円グラフにあるように、全部で32体を分析したところ、なんとそのうち31体から渡来系であるDNAが見つかり、縄文系は1体だけという結果が出ております。つまり在地の人は1人しかなくて、後は全部渡来系の人たちの血筋を受け継ぐ人達というのが分かったということは非常に大きいと思います。少し難しい話になるんですが、DNAの塩基配列というのがあって、それが継承されていく中で突然変異を起こすことがあります。この型をハプロタイプというんですが、祖先が共通のハプロタイプを持ってる人たちの集団をハプログループと呼ぶんです。実は今回分析しているDNAはミトコンドリアDNAといって、お母さんから子供にしか受け継がれない、つまり母系を追跡できる遺伝子なんです。それを分析していった結果、たくさんのハプログループがあることが分かったと。そして、これ

らの出自を、これまでの調査の蓄積からたどっていくと、中国大陸のあちこちに分布しているハプログループであることが明らかになりました（図7）。

だから、青谷上寺地には中国大陸のあちこちに出身地を持つ人たちの子孫たちが集まってきているということがいえるんです。また、それだけではなくて、これだけハプログループが分かっているということは、お母さんが違うということ、つまり全部他人ということなんですね。普通、弥生時代の農村社会っていうと、村じゅうが一族みたいなイメージがありますけどそうじゃないです。みんな他人で、親戚がいないんです。

そういった人たちが青谷上寺地に集まっている、まさに交易都市のような集まりではないかと考えられます。

君嶋 DNAから見ると色々な人が出入りする、都会のような状況であったということで、これもやはり弥生時代のイメージを大きく変える成果だと思います。これはもう、青谷上寺地は村というより、港町といったほうがいいんじゃないかなと個人的にも思っているところです。このように繁栄を謳歌した青谷上寺地遺跡なんですけれども、栄枯盛衰は世のならいでもございまして、古墳時代になりますと、どうもこの繁栄に陰りが見え衰退していく。青谷の弥生ブランド

も絶えてしまうわけなんですよ。これもまた会場から、「ブランド品の技術の伝承はどのようにしていたんですか」というご質問がきていますが、この青谷上寺地のものづくりの文化というのは、後世に受け継がれることはなかったんでしょうか。少し話が飛んでしまうようなんですけれども、例えば現代の鳥取県にですね、弥生時代のもので文化のDNAというものが、わずかでも受け継がれているということはないのか、鳥取県出身の北浦さん、どのようにお考えですか。

北浦 大変難しいですね。私が全くそういう素養がないので説明し尽くせないところがあるんですけど。何とも分からないところなんです。ただ、皆さんも今日ご覧いただいたんじゃないかと思いますが、この会場の外で建具屋さんの展示をしておられて、非常にすてきな木の香りがしているのを、なかなかいいなと思ったところで、現在の鳥取の人達にも、工芸の技術っていうのは確実に何か伝わってるんだろうなっていうことをは感じないわけではないんですけど。

実は大阪の狭山池博物館の館長をしておられます考古学者の工楽善通先生という方がいらっしゃいまして、以前青谷上寺地遺跡の発掘調査委員会で大変お世話になったんですが、この方に平成27年に私どもが隔月で行っております土曜講座にて、ご講演とトークセッションをしていただいたんです。「弥生時代の用と美の誕生～青谷上寺地遺跡から吉田璋也まで～」というテーマで、鳥取県を代表する民芸運動のリーダーの吉田璋也さん（写真24）と青谷上寺地遺跡の出土品を絡めて語るという非常に斬新なものでした。工楽先生はもともと弥生・古墳時代の木製品の専門でいらっしゃって、吉田璋也さんがプロデュースされて作られた木工品に何か弥生時代の工人たちのDNAが引き継がれているんじゃないかというようなことを見抜いておられたようなんです。

吉田璋也さんは、他の方が伝統工芸にイギリスとか朝鮮半島あるいは中国などのいろんな美術の要素を取り入れながら、新しい民芸工芸品というものを創出していったのに対して、日本の民芸運動の旗振り役でありました柳宗悦やなぎむねよしさんの思想を引き継いで鳥取で独自の運動を進めていけます。その柳宗悦さんの思想をよく表す言葉に「用の美」というものがあるんですね。それは、「名も無き職人によって生み出された日用の雑器や生活道具の中にこそ真の美しさがあり、生活に根差したものを作り使うことによって民衆の生活に美しさもたらされる。」と説明されています。つまり、最初から美しいもの、芸術作品を作ろうとしたわけではない、普段使うものを純真無垢な気持ちで作ったことによってそこに美しさがある、それこそが、新しい美の発見であるというようなことで、民芸運動というものを進められていくわけです。

この柳宗悦さんは大変著名な民芸運動家なんですけど、実は青谷とは浅からぬ縁のある方です。例えば青谷には妙好人みょうこうにん因幡の源左げんざさん（妙好人：浄土真宗の在家の信者）という方がいらっしゃって、その言行録をまとめられるために、青谷に1ヶ月ぐらい滞在されています。それから、つい最近、県の無形文化財の指定に染色と糸布しふ（和紙を糸にして織る織物）の保持者とし



写真 24 吉田璋也氏

て山下武^{やましたけし}さんという方が選定されましたが、実はこの山下さんは青谷の方でして、しかも、柳宗悦さんの甥御さんに弟子入りして修行されています。

そういった柳宗悦さんの思想を受け継いだ吉田璋也さんが鳥取の地で色々な民芸品のプロデュースをして、しかもそれを作るだけではなくて、販売のルートも開発して、自分でたくみ工芸店（写真 25）というようなお店も開いたりして、職人さんが生活ができるようなところまで考えていくという展開をしていくわけです。

そして例えば、戦前の吉田璋也プロデュース作品をたくさん作られた虎尾正次さんの電気スタンドなど、その風合いが花卉高杯に似ているところがあるように思われませんか？（写真 26）。それから、鳥取民藝美術館に展示されている栓抜き^{くんとう}のカーブのあり方など、杖の先端につける飾りに付けられた模様の形に似ているなど、私は勝手に思っています（写真 27）。

この吉田璋也さんの薫陶^{くんとう}を受けた方が、その後、県の無形文化財の木工芸の保持者として、2人選定されています。若桜町の茗荷^{みよがさだはる}定治さんと、倉吉市の福田^{ふくたゆたか}豊さんです。福田さんのお父さんの祥^{あきら}さんが先ほどの虎尾さんのところのお弟子さんでして、電気スタンドとかテーブルなどを作っていました。

そして茗荷さんは、お盆とか茶器を作るなかで木目をとても大切に、その美しさを表現



写真 25 たくみ工芸店

するところに苦心されておられます。

こういった作品と青谷上寺地遺跡の出土品を並べてみるとあまり違和感がないと思いませんか？思っていたらありがたいんですけども、これにはやっぱりものづくりに^{つうてい}通底する思いがあるのではないかと思います。

吉田璋也プロデュース作品を作られた職人さ



写真 26 鳥取民藝美術館所蔵電気スタンド（上）と花卉高杯復元品（下）

※電気スタンドは虎尾正次氏の作風を継承した現代作家によって作成されたもの



写真 27 鳥取民藝美術館所蔵の栓抜き（上）と儀仗の把頭（下）

人も、職人であるという意識を強く持って仕事をしておられて、決して芸術家という認識ではないのではないかというふうに思うんですね。弥生時代の人たちも当然そうでした、美という観念はおそらくなかったんだろうと思います。結果として美しいものができると思いますけれどもね。こういった純粹無垢な気持ちで作りながら、しかも少し遊び心のようなものを加えていった部分もあるのかなと思います。例えば写真 28 は、ヤマグワという硬い木で作った

桶形の容器ですが、こういう胴部のそりのようなカーブをつけるとか、縦長の細いスリットをたくさん入れるとか、底に小さな突起を付けて少し浮かせるといったあしらって、使う上で必要のないものだと思うんですよね。その他の桶形容器にも蓋に 2 段の段をつける（写真 29）とか、胴部を浅く彫って段をつける（写真 30）とか、やはりちょっとしたデザインというものをあしらうものがあります。

写真 31 はアカトリといって最近でも使っている民俗例がありますが、舟に入ってくる水をすくい取って外に捨てるための道具です。このアカトリは特異な例でして、柄の部分に孔を空け菱形状に加工しております。これも必要のないあしらいなんですけれども、この辺の風合いに、先ほどの民芸の作品に少し通じる部分があるんじゃないかなと感じています。

写真 32 の鋤の柄、つまりスコップの柄の持ち手の部分とか、写真 33 の木鎌の持ち手の部分のカーブ、これらは機能性を考えた上での結



写真 28 桶形容器と蓋



写真 29 蓋



写真 30 桶と底板



写真 31 アカトリ



写真 32 鋤の柄

果としてのカーブになってるかもしれませんが、この辺も何か美しさを感じます。

写真 34 は匙さじです。弥生人は、手づかみで物を食べると魏志倭人伝ぎしわじんてんに書いてありますけれども、匙はちゃんと使ってたようです。おそらく青谷上寺地遺跡は日本で一番匙が出土している遺跡ですが、それぞれが個性を持った形をしていますね。1 個 1 個、一つとして同じでないものを作るといったあたりに、匠の意地いぢといえますかね、感性かんせいみたいなものを、感じられて大変面白いなと感じます。

こうして見ると、やはり青谷上寺地遺跡の弥生のものでつくりというのが、文化の遺伝子として現在に伝えられているんじゃないかなと思っ



写真 33 木鎌



写真 34 匙

てます。

君嶋 ありがとうございます。2000 年前の青谷上寺地と鳥取の民芸が、結びつきました。横須賀さん、今の話にあったような過去から現在の文化の継承について、何かお話いただけますでしょうか。

横須賀 はい。今言われた文化の遺伝子とか地域の DNA っていうものは、重要文化財の指定の仕事をしてましても、割と感ずることが多くて、少しその辺のご紹介をしたいと思います。

写真 35 は会津若松から少し新潟側に入った、奥会津おくあいづの三島町みしまにある荒屋敷遺跡あらかやしきという縄文時代の遺跡の出土品で、平成 30 年度に重要文化財の指定となりました。先ほど会津漆器を紹介しましたが、荒屋敷遺跡出土品の何が特徴的かって言いますと、やはり漆なんです。1 の糸玉はこれ何に使ったのかはよく分からないんですが、糸を束ねた上に赤い漆を塗って固めてあるんですね。こういった不思議なものも出てますし、2 はパレットに用いられた土器です。3 は石皿いしざらで、実際に赤色の顔料のベンガラを潰すための台となったものです。

もちろん製品もたくさん出てますが、これらの出土品から実際製品を作っていたことが分かります。これらの時期は、弥生時代の前、縄文時代晩期で、二千数百年前というふうなことになるんですが、その時代からおそらく会津漆器に伝わった DNA があるんじゃないかなと感じた例の一つです。

私は茨城出身なので、会津ばかりほめていますが、茨城の人に怒られそうなので一つ例を出したいと思います。写真 36 は茨城県の結城市ゆうきでつくられている結城紬ゆうきつむぎという絹織物です。また、結城市だけでなく、隣の栃木県おやまの小山市こやまとか、下野市しもつけといった鬼怒川沿いの地域では名前は違いますが盛んに絹織物が作られています。この鬼怒川は、今は非常に暴れ川で、数年前も大きな水害を起こした川なんですけども、元々

は絹川きぬがわとして常陸風土記ひたちふどきにも載っている、奈良時代にまでさかのぼることのできる絹織物産地です。

写真 37 は平成 29 年度に指定したもので、やはり鬼怒川沿いの下野市の甲塚古墳かぶとづかから出土した機織埴輪はたおりはにわです。2つがそれぞれ違う種類の織機しよつきを表現していて、向かって右側の織機の上にはですね、ご丁寧に人まで乗っています。復元するとカラフルな服を来た人が白黒で染め分けた織機で織物を織っているということにな



写真 36 結城紬



1



2



3

写真 35 荒屋敷遺跡出土品



写真 37 甲塚古墳出土埴輪（上・中）とその復元品（下）

ります。実はそういうものを表現した埴輪は日本でこれが唯一なんです、それがここから出てくるのは必然性があるって、現在の絹織物に繋がってくるのは間違いないんじゃないかと思っています。

このように、その地域に根差した DNA というのは、今は見えづらくなっていることはあるかと思うんですが、何かしら受け継がれている部分は大きいんだと感じているところです。

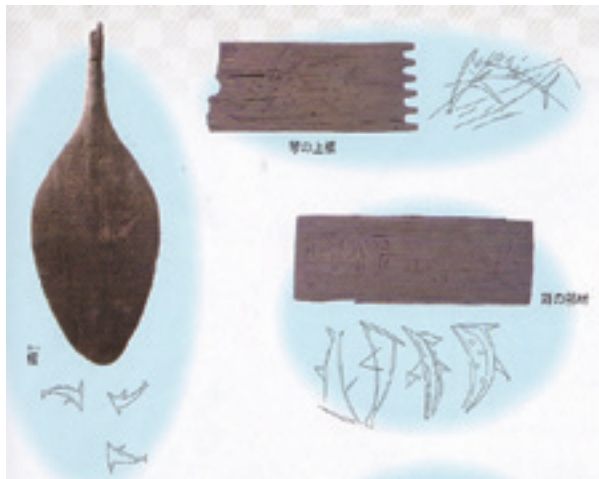


図8 魚の意匠

君嶋 ありがとうございます。縄文時代、弥生時代、古墳時代といいますと、1000年以上も昔のことでございますので、何かこう今の我々と全く関わりのない社会のような印象を持ちがちだと思うんですけども、今のようなお話を伺いますと身近といいますか、時間の長さがそれほど感じられないといいますか。現代に繋がっているっていうことを感じられるっていうのは、本当に素晴らしいことなんじゃないかなと思いました。

では最後にですね、お二方にお聞きしたいと思います。お二方とも、指定に向けての調査の中で、1000点以上の製品をひとつひとつぶさにご覧になられたわけなんですけれど、このたくさんの指定品の中で、自分はこれが一番素晴らしいと思われたもの、お気に入りの一品をお聞かせいただければと思います。では横須賀さんから。

横須賀 やはり、図8のサメや魚の絵が描いてある資料ですよ。一番素晴らしいというよりは、私が一番好きな資料です。考古学を勉強して今こういう仕事に就いてるんですけども、考古学が苦手な私としてはですね、なかなか考古学では解明できない、こういった精神的な資料



写真38 不明木製品

にやはりロマンを感じるといいますか。サメと言ってますけど、君嶋さんに教わったところではボラ説もあるらしいですが、そういうことを一つ一つ考えるのも、楽しいんじゃないかと。ただ私としては、やはりどうしても心情的に因幡の白兔の話とつなげたくくなりますね。その地域のDNAってことを考えても、間違っていないんじゃないかと感じてるところです。もう1点挙げさせていただければ、我々がマジカルステッキと呼んでいた写真38を選びたいと思います。渦巻状の文様がついた杖のようなもので、実は柄のところに穴があいていて何かを差し込めるようになっています。何に使ったのかというところは、おそらく君嶋さんあたりが解明してくれると思いますので、今後の成果を期待しております。

君嶋 はい、大変難しい宿題をいただいてしまったようでございます。北浦さんいかがでしょうか。

北浦 おすすめということになると花卉高杯ですとか桶型容器とかそういったものが一番だろうなと思ながらも、それではちょっと意外性がないので、ちょっとマニアックな逸品をご紹介します。

それは図9の櫛で、鹿の角を加工したもので厚さが1.5ミリぐらいしかないのですが、先っぽに5本の歯を刻んで付けてるというものです。この薄く作るのもすごい技術だなと思ながらもですね、頭の部分にうっすらと刻まれている文様に心惹かれます。

まず下に平行線と山形のような模様があって、上の平行線の上に三つ、尖ったものが突き出ているような線が刻まれています。

これは何かっていう正解はないんですけど、実は私、この文様が海面からサメの背びれが出ている様子を表現しているのではないかという妄想を抱いております。よく見るとこの線の隙間に赤い顔料が残っていて、本来は真っ赤に

塗られていたんだろなと思うんですけど、そういったオシャレなことをしているなかに、さりげなくこういうことを表現するところになかなかにくいなと思うところがございます。加工の技術のすばらしさと、青谷の海辺の風景を表現する心、これぞ青谷上寺地かなというふうにした次第です。

君嶋 ありがとうございます。この櫛は私も何回も見ているはずなんですが、サメだと思って見たということではなくてですね、まだまだ隠れた魅力というものが、この指定品の中にも見つけられるのかもしれませんが。

会場の皆さんも、今挙げられたような展示品をこれからご覧になることがありましたら、今日聴かれた話を思い出しながら見ていただくのも一興かなと思います。さて皆さんのお気に入りの逸品はどれになるんでしょうか。もし、まだそういった逸品がないという方がいらっ



図9 櫛に描かれた文様

しゃったら、これからぜひ見つけていただければと思います。

まだまだお話を伺いたいところですけど、ここでお開きにさせていただければと思います。本日は青谷上寺地遺跡を通して、弥生時代のイメージが大きく変わる日になったのではないかと思います。

【挿図・写真の出典】

写真 21 群馬県立歴史博物館より画像提供

写真 22 福島県立博物館より画像提供

写真 24・25 鳥取民藝美術館より画像提供

写真 26 上・27 上 鳥取民藝美術館所蔵資料

写真 35 三島町教育委員会より画像提供

写真 36 結城市観光課より画像提供

写真 37 下野市教育委員会より画像提供